発　行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北32条
西5丁目2-32-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610

POLE

第73号　2012.2.25
北海道ポーランド文化協会会誌

遠藤道子先生を偲んで

三浦　洋

総会に参加された
遠藤副会長
（2002年）

北海道ポーランド文化協会の設立当初から副会長をつとめられ、長らく協会の発展に尽くされた遠藤道子先生が、去る2011年11月24日にご逝去されました。93歳でいらっしゃいました。

水戸出身の遠藤先生は東京音楽学校(現・東京芸大)で学ばれた後、ピアノ演奏家及び教師の道を歩み、戦後、北大に復職された夫君の良男氏、令嬢の郁子さんとともに札幌に移住されました。以来60年余りにわたって大学教育や個人レッスンの場で約3千人に及ぶ門弟を育てられ、今日、北海道が「ピアノ王国」と呼ばれる礎を築かれました。ポ文協の第2代会長をつとめられた谷本一之先生(2009年ご逝去)も北海道大学教育学部で教鞭をとられていた時代の教え子で、谷本先生は就任あいさつの際、「私は遠藤先生の弟子ですので、ご命令に逆らえず、会長を引き受けました」とユーモアまじりに語られました。

遠藤先生は、往時の日本では顧みられることの少なかったショパンの音楽を普及する活動に情熱を傾けられました。日本ショパン協会北海道支部を設立され、ショパンを中心にポーランドの音楽を世に広められた活動は、道内はもとより、日本全体のピアノ音楽界を活性化しました。そのご功績により1986年にポーランド文化功労勲章を受章されたことは、先生の歴史的偉業といって過言ではないと思います。この受賞が、1987年のポ文協設立にとって一つの原動力になったことは疑いありません。

ポ文協の催しに出席された際には、社会主義体制下のポーランドで郁子さんと暮らした頃の思い出を懐かしそうに語ってくださいました。名ピアニストの故ハリーナ・チェルニー・ステファンスカ女史がどのようにマズルカを教えたか、夫のルドヴィク氏はどんな方だったか、クラクフがどんな街だったか――記憶の泉から言葉がとめどもなくあふれ出てくるごようすでした。また、協会の創立15周年記念誌が完成した際には大変喜ばれ、「多くの方にお贈りしたいです」といって激賞されました。

大正7年生まれの先生は、ピアニストという文化的先端を行く“職業婦人”の道を進まれ、凛とした居ずまいをいつも保たれました。まさに、颯爽たる「大正生まれのモダンガール」です。ショパンを、そしてポーランドを敬愛した先生の精神的背景には、幼少期にふれたモダンな大正文化がいつも薫っていたように思われます。

12月11日にご自宅の「遠藤道子記念音楽館」で営まれた音楽葬では、先生のレパートリーだった曲目などが郁子さんの手で演奏されました。

ポ文協に対する多大なご貢献にあらためて感謝申し上げ、謹んでご冥福をお祈り致します。

運営委員（みうら・ひろし）

北海道新聞（夕刊）2011.12.12から転載

愛したショパンで別れ
札幌で遠藤道子さん音楽葬

道内ピアノ教育界の重鎮でピアニストとしても活躍した遠藤道子さん＝前日本ショパン協会支部長＝の音楽葬が11日、札幌市中央区の自宅で営まれ、道内外の音楽関係者や教え子ら約200人が別れを惜しんだ。

国際的なピアニストの長女郁子さんが「湿っぽいことがあまり好きでない母だった。『いってらっしゃい』という気持ちで送っていただければ」とあいさつ。遠藤さんが演奏や普及に尽くしたショパンのピアノ曲などを1時間余りにわたって演奏し、参列者が次々と遺影に花をささげた。〈以下略〉

第 59 回 例会

近くて遠い土地 －「樺太」。
図や写真でわかりやすく紹介する講演会を特別企画しました。
是非お越しください！あなたも意外な接点に驚きます。

樺太のポーランド人の軌跡

－彼らはどこから来て、如何に生き、どこへ帰ったのか－

日本とポーランドとの繋がりについては、今までもいろいろな場面で語り継がれてきたが、意外にも身近なところで接点があったことを知るのである。それはサハリン島の一部が日本領樺太であったとき、残留ポーランド人と呼ばれる人々が僅かに存在していた。

樺太時代には彼らは何故かロシア人と呼ばれて、正しくポーランド人と認識することはなかった。これらに加えて 1920 年頃には、ロシア革命後の混乱から亡命ロシア人とか亡命ポーランド人と呼ばれる人々も一緒だった。1930 年頃には、これらの人々は全て「白系ロシア人」と呼ばれるようになった。

ところが、1990 年頃から彼らはロシア人ではなくポーランド人だったことを知るのである。彼らは、1918 年、ポーランド独立後は、ポーランドのパスポートを取得し、何時の日にか母国に帰るための準備をしていたのであるが、樺太時代に母国に帰る機会は訪れなかった。彼らは、樺太時代に日本の教育を受け、ロシア人との差別化を図っていたのであるが。

この歴史の流れの中で、あるポーランド人一家の軌跡を辿ることで、彼らの真の姿を知りたいと思う。

講演者紹介
尾形 芳秀
（おがた・よしひで）

1937 年、樺太の豊原に生まれる。樺太の残留や亡命ポーランド人とともに旧市街で育ち、遊び、同じ学校で学んだ貴重なご経験から、その時代の真実を語っていただきます。

～ 講演会へご招待します ～
「樺太のポーランド人の軌跡」

◆日時：2012 年３月 31 日（土）
14：00～16：00

◆場所：かでる２・７
510 会議室
（中央区北２西７）

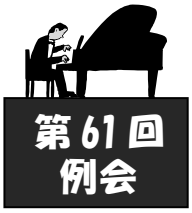
◆主催：北海道ポーランド文化協会

◆お問い合わせ：☎011－790-8610
参加無料
事前申し込みは不要です。
直接会場へお越しください。

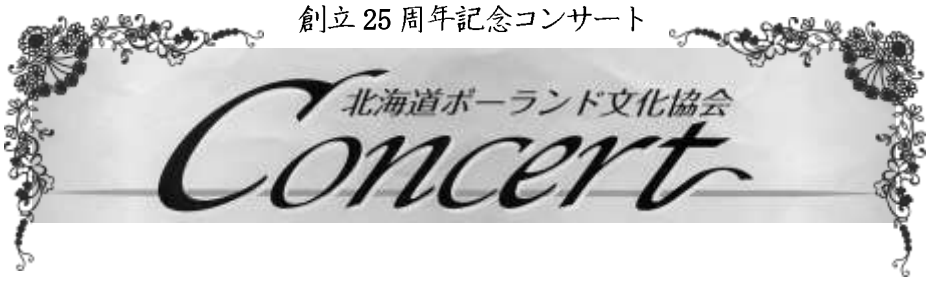
Дом Осипова

Владимировка – Тоехара – Южно-Сахалинск

樺太の人々にとって、ポーランド人の風俗習慣はヨーロッパの文化を知る新鮮なものだった。樺太の主都「豊原」には、数家族のポーランド人が住み、中でも「オーシップ家」の住むログ・ハウスは、この街の旧市街にあり一番大きく目立つ建物だった。サハリンで発行されている「ソビエツキー・サハリン」(2011 年 9 月 7 日付)紙に幻のように掲載されたのである。私はサハリン州立大学やサハリンの歴史研究家にその所在を伝え、発掘のきっかけになったのであるが・・・。



創立25周年記念コンサート



2012.5/12（土） 開場 PM 1:00
開演 PM 1:30

札幌コンサートホール Kitara 小ホール
（全席自由 ¥2000 ）

フレデリック・
フランソワ・ショパン
（1810-1849）
Fryderyk
Franciszek
Chopin

ヨハネス・ブラームス
（1833～1897）
Johannes Brahms

カール・タウジヒ
（1841～1871）
Carl Tausig

フランツ・リスト
（1811-1886）
Franz Liszt

ツェーザリ・アントーノヴィチ・
キュイ
（1835～1918）
Цезарь
Антонович Кюи,

テクラ・バダジェフスカ=バラノフスカ
（1834～1861）
Tekla・Bądarzewska-Baranowska

スタニスラフ・モニュシュコ（1819～1872）
Stanislaw Moniuszko

北海道ポーランド文化協会の皆様

演奏部門は、会員の皆様、運営委員の皆様のお力添えを頂き、有意義な演奏会を開催させていただいてきました。今年は創立25周年を記念して、5月12日（土）午後1時半から、Kitara小ホールでの演奏会を予定しています。

今回は、これまでの演奏会の成果と反省から、～ショパンとロマン派の作曲家たち～の副題のもと、演奏曲の幅を広げました。結果、いつもの演奏会より、皆様のお耳に慣れた曲をプログラミングすることができたと思います。また、長くポーランドで研鑽を積まれた**安田文子**さんが加わってくださったことで、札幌では滅多に聞けないタウジヒの作品も演奏予定です。わずか 30 歳で夭折したタウジヒは、リストにも師事したピアニスト・作曲家です。演奏曲は、**松井亜樹**さんがソプラノで演奏されますモニュシュコの作品からの幻想曲であり、キュイはモニュシュコに師事した、という、循環するようなプログラムになりました。このような貴重な楽曲がプログラミングされ、「ポ文協が主催する演奏会の意義」も示すことができたように思っています。

ピアノソロ、二台のピアノ、歌曲、ポーランド語の詩の朗読等、変化に富んだ華やかなプログラムで、皆様には充分にお楽しみいただけるのではないかしら、と自負しております。中島公園の新緑香ります午後のひととき、是非皆様のご来場をお待ち致しております。

薄井豊美（うすい・とよみ＝演奏部会）

主催：北海道ポーランド文化協会
後援：駐日ポーランド共和国大使館・札幌市・札幌市教育委員会・北海道新聞社・日本ショパン協会北海道支部・札幌大学・㈱ヤマハミュージック北海道札幌店・㈱河合楽器製作所北海道営業所
交通：札幌市中央区中島公園1-15 地下鉄「中島公園駅」より徒歩7分・市電「中島公園通」徒歩4分
お問い合わせ先：011-556-8834（安藤）

BONSAI Coiffure

［ミドリの黒髪］
実際こんな髪形はありませんが、完成したら究極の日本髪でしょうか。（笑）

～国際漫画コ

私はこうして北海道ポーランド文化協会にたどりついた！

平凡な一市民である私にとって、風刺漫画を描くことは、世間に物申す手段であり、仲間とつながるインフラでもあるが、父親の脳梗塞と入院を機に、それまでの生活サイクルを見直さざるを得なくなった。

もう、取材時間が取れそうにない。定例展覧会の休止を決めた私は、雑誌や業界紙で小さく作品を発表していたものの、それまで支えてくれた周囲の期待に思うように応えられず、作家や活動家のエリアからも距離を置くようになっていた。

そんな毎日に新たな活路を見出すべく、在宅で無理なく作品を発信できないかと注目したのが、海外コンペへの応募だった。以前、国際交流パーティーで、語学の苦手な私は、自作の風刺漫画持参でコミュニケーションを取った経験がある。言葉の壁を越えて思いが伝わった時は、小さな自分にも少し自信がついたものだ。

そして、その記念すべき最初の海外コンペ作品の宛先が、ポーランドのレグニッツァだったことから、今回この原稿を書くご縁に恵まれている。当方、恐縮しきりであるが、さらに重ねて白状すると、この国を一番に選んだのは特別な思いではなく、たまたま昨年末に見つけた 2012 年最初の海外コンペの開催国がポーランドだった、という実に安直かつ体たらくな理由なのだ。（本当にゴメンナサイ）

さて、一口に海外コンペといっても、作品を丸めて送っていいのか、医者がレントゲンを入れるような大型封筒があるのか、航空便でどれくらいの費用と日数がかかるのか、エントリー用紙は英語表記なのか、自己紹介欄にはどんなことを記入すべきか、まるで見当がつかない。こんな些細なことから、具体的な作業を積み重ねるのだろう。

実は私、国内の風刺漫画コンペですら、それまでずっと敬遠していた。というのは、社会適応能力ゼロの大御所作家が、現実逃避の成れの果てに手がけた作品を、自分は評価していないし、更に、その人たちが審査員をつとめるご大層な大会なんざ、参加する意義を見出せないのだ。まあ偉そうに吠えたが、半ば庶民のひがみだ。

もちろん自分ごときに、世界レベルの実力がないことは百も承知しているが、その分、余計なしがらみがないし、精神衛生的には誠にありがたいこともあった。

さて、手探りで走り始めたが、まず作戦を練ろうにも、コンペ参加以前に、その国の基本的な知識が必要だろう。ポーランド初心者の私のイメージだと、コペルニクス、ショパン、キュリー夫人、…ぐらいのレベルだ。あとは、資料書棚に世界ジョーク集がある程度で、大国が小国を見下すお決まりのトポスから、フランスはベルギーを、ドイツはポーランドを茶化した感じの失礼な内容だ。まともな資料にするには心もとない。

仮に、あのコペルニクス像をモチーフに使ったとして、手に持った地球儀をアイスクリームに変えたイラスト a と、地球儀をそのままにしてコペルニクスをヒトラーに替えたイラスト b とでは、さらに私のような浅知恵の黄色いサルが描いたとして、現地の人にどう受け止められるか、想像力なり具体的な精査が必要になるだろう。

とりあえず、仕事で国内外を行き来する幼馴染と、アウシュビッツ平和ツアーを担当するツアーガイドに話を聞いた。ステレオタイプながら、カトリック、親日国、ソ連嫌いなどのキーワードを貰い、最近だと日本のアニメやキャラクターも人気とのこと。

次に、イラスト投稿サイトで知合ったポーランド女性に、私の作品の中から好きなものを数点選んでもらって、大まかな傾向と対策を考えた。自分はポーランド語が出来ないので、たどたどしいインチキ英語メールを駆使しつつ、細かい情報を集めていく。

ンペへの挑戦～

ふとした出会いがきっかけで誰かとつながり、新しい自分が浮かび上がる。そんな経験を「のざわさん」に紹介していただきました。あたたかいイラストと一緒に心もほっこり。

どの国にも言えることだが、政治はおちょくりの対象に出来ても、宗教はそういう訳には行かず、この部分の取扱いには注意が必要だと改めて感じた。

その後、北海道ポーランド文化協会なる団体をネットで見つけるも、記載されていた電話番号が通じず、そろそろ調査に行き詰まりを感じた。

「もう描画に取り掛かろう。これ以上、市内で情報が得られそうにない。運良くポーランド人と繋がったとして、漫画に興味があるかも言葉が通じるかもわからない…。」

半ば諦めかけていたところ、行きつけのフェアトレードレストランから、思わぬ情報を耳にした。時々店に訪れる男性客が、昨年そのポーランド協会と共同で、映画祭を開催したという。私も面識ある人だったので、早速 SNS 経由で連絡を入れてみると、自分から協会事務局につないであげると、なんとも嬉しい協力と出会いの機会を得た。

コンタクトの取れたポーランド協会の窓口は、大学教員の佐光さんだった。そして、さらなる情報を得た。構内の学生食堂に、ポーランド人の集う定期交流会があり、その人たちは日本語も話せて、日本文化にも関心のある一団のようだった。

「うわあ、この人たちに会いたい。でも、海外から勉強に来るような人は、おそらく上流階級出身だろう。今の私にとってジャストミートな集会でも、生来の貧乏人で人生観の異なる下衆な私を、こちらの交流会の皆さんは受容れてくれるだろうか…。」

悩んでいても先には進まない。まずは、佐光さん経由で訪問の連絡を取り付け、平日の休みを調整して、提出候補作品を手に恐る恐る顔を出した。事前に事情を聞いていた一団は、食事の最中だったけど、とても温かく迎えてくれた。

持参作品数点の人気投票をしつつ、作品毎に感想や意見を求めた。自分一押しの震災復興ネタが、必ずしも外国人に受容れられる訳ではなく、ま

Adventurous Game

「究極のレジャー」
ギリシア経済危機が話題ですが、遊び呆けた報いと見る向きもあるようで…。

たワンポイントの工夫で、海外仕様に変身する作品があるのも、勉強になった。自分目線だと、各々の制作過程がバイアスとなり、作品の正当な評価がしにくくなる。その点、他人目線の方が、そういう背景が分からないし、ある意味シンプルかつシビアだろう。

今回は親日国のポーランドが開催地ということで、国際ニュースと日本文化のネタを抱合せて、提出を計画した。国際作品は自分でほぼ決めていて、ギリシア経済を題材にしたものだ。実際に反応も良く、そのまま採用する。一方、日本作品では活け花ネタが一番人気だった。が、一緒に持ってきた盆栽ネタを、その場にいた女性のアドバイスに従って描き直せば、外国人にも受容れられそうな路線になったので、今回はその盆栽作品を海外用にアレンジして、提出することにした。

このときの小さな経験が後押しとなったのか、この日以降、国際漫画コンペには現在までイタリア、中国、そしてポルトガルにも作品を送っている。ポーランドコンペは、3 月初旬に WEB 上で審査結果が出るが、入賞云々ではなく、新たな活動に喜びの一歩を踏み出せたのは、協力してくださった周囲の皆様のおかげであり、感謝にたえない。

のざわゆきお（風刺漫画家）
1968 年、札幌市生まれ。
小樽商科大学卒。
社会人から創作活動をはじめた、
技術のおぼつかない非・芸術エリート。
本業の傍ら、限られた時間と予算内で、執筆・描画・工作などをこなす。
自らの作品発表は、美術でなく報道と位置づけ、思いの伝達手段の一つ。

— ポーランドだより —

変わりゆくポーランドの消費文化

津田晃岐

ポーランドの西部の町、ポズナン市 に住み 3 年になる。市内のアダム・ミツキェヴィチ大学と外国語大学で教鞭をとっている。かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998 年から 2000 年にかけてクラクフ市に留学。ポーランド人が日本をどのように見ているか、そして現在のポーランドがどう変わったかを興味深く眺めている。

1.「旧工場の新館」

先日、ポズナン市のショッピングモール Stary Browar に行った。Stary Browar は旧市街にあり、町の中心の広場へと伸びるプウヴィェイスカ通の起点に建っている。プウヴィェイスカ通はポズナン市の有名な繁華街で、歩行者天国になっており、常に多くの買物客や観光客で賑わっているが、週末ともなればそれこそ大勢の人でごった返す。そんなプウヴィェイスカ通に聳える Stary Browar は、当然いつも賑わっており、若者たちにも人気の店である。

このショッピングモールは、ちょっと変わっている。「Stary Browar」は、ポーランド語で「旧ビール工場」という意味で、その名の通り、かつてビール工場だった建物を改築し、ショッピングモールとして再生したものである。糖化槽、煮沸釜といった旧ビール工場の中心設備が収まっていた建物を利用した「アトリウム Atrium」(2003 年オープン)と、その奥に増築された新館部分「パサージュ Pasaż」(2007 年オープン)とから成っており、アトリウムとパサージュの間には、ガラスの屋根と壁で覆われた「芸術の中庭 Dziedziniec Sztuki」(2004 年オープン)が横たわり、Stary Browar 全体を繋いでいる。新館部分も含めて、建物全体が赤レンガ造りの、同じ様式で建てられており、統一感を保っている。「芸術の中庭」は、様々な芸術イヴェントや展覧会に利用される。

Stary Browar は、正式名称を「Stary Browar 50 50」と言い、ビジネスと芸術の融合施設として作られた。右肩の二つの「50」は、「どんなプロジェクトでも、その 50%は芸術が、残りの 50%はビジネスが決定するべき」という、経営者グラジナ・クルチクの理念から採られている。

Stary Browar は 2005 年、国際ショッピングセンター評議会(ICSC)によって「中規模店」部門の「世界最優秀ショッピングセンター」として表彰された。審査員は、昔のビール工場を活かした建築だけでなく、文化事業と商業活動のユニークな融合をも高く評価した。増築後の 2008 年にも国際ショッピングセンター評議会によって、今度は「増築」部門の「世界最優秀ショッピングセンター」として表彰された。ショッピングモール全体としての雰囲気を壊さない新館が評価された。

外観だけでなく、内部も赤レンガが剥き出しになった建物は、古き時代を伝えながらも、現代人の感覚にすんなりと合い、どこか落ち着きのある雰囲気を醸し出している。往年のビール工場が現代風のショッピングモールとして、見事に新たな生命を吹き込まれている。古い物が活かされ、今に生きている。

現在、200 店以上のテナントが入っているだけでなく、劇場、コンサートホール、映画館、画廊なども備わっている。ポズナン市民の生活に、そして若者たちの間にも、すっかり浸透しており、日常の会話の中でも「ビール工場の旧館で売っていた」とか「旧工場の新館で買った」といった表現がしばしば聞かれる。

2.「ルンペクス」

古い物の再生といえば、ポーランド人の古着に対するこだわりも面白い。

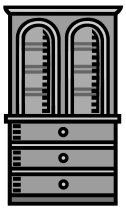
「古着屋」は、ポズナン市のあるヴィエルコポルスキ地方では「ルンペクス lumpex」と呼ばれる。ポーランドの他の地方では「シュマテクス szmatex」、「チュホラント(チュフラント)ciucholand(ciuchland)」とも称される。

「ルンペクス」は、「lump」と「Pewex」から作られた造語である。「lump」は、「襤褸服」を意味するヴィエルコポルスキ地方の方言で、ドイツ語から来ている(日本語で「浮浪者」を「ルンペン」と言うが、語源は同じである)。また「Pewex」は、共産主義時代の企業「国内輸出会社 Przedsiębiorstwo Eksportu Wewnętrznego」の略称で、そこでは、当時入手困難だった西側諸国の商品

を外貨（主にドル）で買うことができた。この「ペヴェクス」を利用したのは、ほとんどの場合、ポーランドに居住していた西側の人間に限られ、普通のポーランド人にとって「ペヴェクス」は、憧れの外国製品を扱う店であった。したがって造語「ルンペクス」は、「外国から輸入された珍しい古着を買える店」を意味する。

「シュマテクス」も語源的にほぼ同じで、「襤褸布、雑巾」を意味するポーランド語「szmata」と「Pewex」が結び付いたものである。一方、「チュホラント（チュフラント）」は、「衣服」を意味するポーランド語の口語「ciuch」と英語の「land」から成っており、ここでは英単語が西側の商品を暗示している。

1989 年の民主化以降、ポーランドでは西側の文化や製品が急激に入ってきた。衣服も例外でなく、西側から古着を仕入れてきては売る「ルンペクス」が増えた。当初は、西側の文化を伝える煌びやかな服というだけで喜ばれ、多くの店で「量り売り」が成されていた。私が留学していたときも、人々はスチームの利いた湿度の高い店内をめぐりながら、平台の上に押し広げられた大量の衣類の中から、気に入る服を文字通り「掘り出し」て、かごに入れ、レジで精算していたが、服に値札は付いておらず、レジ脇の秤で衣類の重さを量り、「グラムいくら」といった単位で買っていた。



現在、ポーランド人の生活にも物があふれるようになり、「ルンペクス」をめぐる状況も少しずつ変わっている。昔と違い、単に外国の服というだけではもう魅力はない。したがって「ルンペクス」の側も、生き残りを掛けて、自店の特色を打ち出している。例えば、安さに徹して量り売りを続ける店、あるいはブランド品を売りにしている店、あるいはコレクションの売れ残り品に特化した店（この場合、厳密には古着屋ではなく、「ルンペクス」の名に値しないのだが）といった具合である。そして、買う側も、ちょったしたゲーム感覚で「掘り出し物」ハンティングを楽しんでいる。「ルンペクス」に同じ商品は 2 つとない。衣服の一着一着が、デザイン、色、柄など、どこかしら異なっている。ここにはまだ、消費者が一つの物をじっくり吟味し、選ぶ過程が残っている。物と向き合う時間があり、それを楽しむ人がいる。望み通りの品を掘り出した暁には、「それ、どこで買ったの？」と訊かれ、「ルンペクス」とこっそり答える。「えっ、全然見えない！」との賛辞をもらえば、それこそ誇らしい瞬間である。

3.「全能の消費」

ポーランドの演出家タデウシュ・カントル（1915-90）は、戦後、社会が復興していく中で、戦争の傷を受けたり、古くなったりして打ち捨てられた「みすぼらしい物」に特別な眼差しを注いできた。「みすぼらしい物」を自分の芝居の舞台に上げることで、それらに新たな意味を与え、再生していった。カントルは自著『ミラノ講義』の中で、現代の特徴の一つとして「全能の消費」を挙げている。

すべてが商品となり、
商品は血まみれの神となった。（…）
人が人を、
その思索を、権利を、習慣を、
その孤独を、そしてその人格を貪り喰っている。

大量生産・大量消費が可能となった時代、物はもはや生活を埋め尽くすのですらなく、ただ凄まじい勢いで流れ過ぎるようになった。物は、カントルがそれに新たな生命を回復するよりも速く消費され、捨てられ、また生産される。一個の物が持つ価値は、当然低下する。また、大量生産・大量消費のために画一化された物、あるいは均一化された情報は、人々の生活をも画一化、均一化し、人間を没個性に変えていく。現代文明の恩恵を享受しながらも、それに埋もれ、個性を失いつつある人間を、カントルは「みすぼらしい人間」と呼んだ。

大切なのは個人の世界である。

今こそ個性が大事とは、カントルのメッセージである。カントルがこの『ミラノ講義』を書いたのは、1986 年である。その頃からカントルは、「全能の消費」がまるで「全能の神」のように君臨し、人間の個性が危機に晒されることを警告していた。

現在のポーランドは、物にあふれている。その分、一つの物に注ぐ時間も思いも段々少なくなっている。大量生産・大量消費の恩恵をこうむり、人々は次第に似たような価値観、宣伝されるライフスタイルを持つようになっている。あちこちのスーパーやデパートやショッピングモールで、様々な機会を利用したセール、フェア、バーゲンがほぼ年中繰り広げられている。先日、私が Stary Browar へ行ったのも、テナントの靴屋で「冬物売り尽し」セールがあったからだ。「冬物」と直接関係のない店舗では、ちょうど「祖母の日」（1 月 21 日）と「祖父の日」（1 月 22 日）が近かったことから、それにちなんだセールをやっていた。「お祖母ちゃん、お祖父ちゃんに美味しいワインを」（酒屋）とか「お祖母ちゃん、お祖父ちゃんに手作りのメッセージカードを」（文具店）といった具合である。現在は「バレンタインデー」が迫っており、我が家のポストにも「バレンタインデー」関連商品の広告が投げ込まれ始めている。

そして「バレンタインデー」の後には、復活祭がやってくる。

つだ・てるみち（ポズナン外国語大学講師）

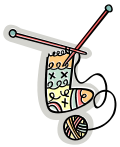
今後の活動予定

◆<第 59 回例会>～ 講演会 ～
「樺太のポーランド人の軌跡」参加無料
３月 31 日（土）14：00～
かでる２・７　510 会議室

◆<第 60 回例会> ポーランド映画セレクションⅡ
５月5-6 日（土日）　只今、作品選定中！
北大学術交流会館講堂

◆<第 61 回例会> 創立 25 周年ピアノコンサート
５月12 日（土）13:30～
札幌コンサートホール Kitara 小ホール

◆<第 62 回例会> ポーランド文学朗読会
６月16 日（土）14:00～　只今、出演者募集中！
北大国際文化交流活動室（クラーク会館 3F）



新入会員のご紹介

霜田　英麿さん（11 月）が入会されました。
どうぞ宜しくお願い致します。（副事務局長・栗原から）

駐日ポーランド大使館＋シアターX
能形式による戯曲（詩劇）「鎮魂（ちんこん）」

2012 年３月５日(月)18：00～

シアターX（カイ）
（東京都墨田区両国 2-10-14 両国シティコア内）

新作能『鎮魂』(2013 年上演)のための
プレリュード<能形式による詩劇>
ふくしま　および　ホロコースト
――犠牲者追悼の夕べ　プレリュード――

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ-チェホフスカ女史＝写真＝(駐日ポーランド共和国特命全権大使)は、元女優でもあり、著名な能研究者でもいらっしゃいます。昨年 2 月、ワルシャワの劇場と東京の国立能楽堂にてショパン生誕 200 年を記念し「ポーランドの能」第一弾の『調律師-ショパンの能』を上演しました。(POLE 第 69 号 10 ページ掲載)昨年 3 月の東日本大震災を経て、ロドヴィッチ大使は「ふくしま」および「ホロコースト・戦争」の悲劇を記憶する詩劇として、第二弾の新作能『鎮魂』を書き上げました。この詩劇をロドヴィッチ大使ご自身と能と狂言の演出を多く手掛ける演出家・笠井賢一氏とが朗読します。

<連載俳句>

ポーランド & ニッポン歳時記

大ジャンプ
アンダー
u
21
の冬

千代麿

<岩見沢市在住。霜田千代麿さん>

1992 年より作句する。伝統俳句協会員。現代俳句協会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

冬の陽を
眺めて滲む
涙かな

陽石

今年の冬は、白く染まったのも初めのうちだけだった。その後はとにかく灰色で、暗くて、寂しい。だから、ごく稀にしか姿を見せない太陽は、とても眩しいのだ！

zimową porą
spojrzałam prosto w słońce
łzy napłynęły　　Yōseki

<ポズナン市在住。ポーランド人女性 陽石さん>

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は三年前から詠みはじめる。

POLE
第 73 号
ポーレ編集委員会
氏間多伊子/柏木由美子/栗原朋友子
佐光伸一/ラファウ・ジェプカ

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 73 号（2012 年 2 月）

目　次

〈三浦洋「[初代副会長] 遠藤道子先生を偲んで」・・1
〈第 59 回例会〉講演会：尾形芳秀「樺太のポーランド人の軌跡」[案内]・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
創立 25 周年記念コンサート [案内]、薄井豊美「北海道ポーランド文化協会の皆様」・・・・・・・・・・・3
のざわゆきお「国際漫画コンペへの挑戦～私はこうして北海道ポーランド文化協会にたどりついた！」・・4
津田晃岐〈ポーランドだより 5〉「変わりゆくポーランドの消費文化」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
霜田千代麿・陽石[津田モニカ]〈ポーランド＆ニッポン歳時記〉／ [事務局より] 今後の活動予定：講演会「樺太のポーランド人の軌跡」、ポーランド映画セレクションⅡ、創立 25 周年ピアノコンサート、ポーランド文学朗読会／駐日ポーランド大使館＋シアターX（カイ）～能形式による戯曲（詩劇）「鎮魂（ちんこん）」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8